



外 観

西宮市の県道・大沢西宮線(建石線)の拡幅は、戦後すぐの昭和21年に都市計画決定され、約60年後の平成17年にその一部の工事が完成した。

この拡幅工事によって、竣工後約50年を経て街並に忽然と姿を現した建物がある。壁柱によって持ち上げられた、独特のテクスチャを持つレンガ壁が目を引き、吉阪隆正設計の浦邸である。竣工は1956年。

数学者・浦太郎と吉阪の出会いは1951年。留学先のフランスで2人は初めて会い、その後浦氏は吉阪に住宅の設計を依頼する。(「兵庫の人」参照)1952年に帰国した吉阪は、まず自邸の設計に取りかかる。1954年には浦邸の敷地が決定し、こちらでも設計が開始されている。

浦邸をはじめ訪れた時に、吉阪自邸と浦邸が同時期に建設されたにもかかわらず、全く対照的な建物になっていることに驚かされた。取り壊されるまで常に手が加えられ、変化し続けた吉阪自邸と、竣工後50年を経て、今なおその大部分が竣工した当時の完成型のままで現存している浦邸、その違いにたいへん興味を持った。

■ピロティ

浦邸の最大の特徴はその構造形式にある。2つの正方形の箱をそれぞれ4本の壁柱で持ち上げたピロティ形式としているが、その「く」の字型の壁柱は正方形の角にあるのではなく、各辺の中央に置かれている。これにより建物の四隅が開放されることになる。それがもっともよくわかるのがピロティである。玄関へのアプローチが、道路からピロティを抜けていくように計画されているが、ここは斜めに視線の抜ける広がりのある空間となっている。

このピロティを浦氏は「公共の空間」であると位置付けている。それは浦氏と吉阪がパリで体験した、スイス学生会館の建物でコルビュジエが示した近代建築五原則のひとつ、ピロティによる「大地の解放」という理念そのものである。



ピロティを抜けて玄関へアプローチ 視線が斜めに抜ける(※)

■4つの正方形

ピロティを抜けて建物の北側に回り込み、階段を上ったところに玄関がある。玄関及びホールは2つの正方形の間の空間に置かれている。この空間に足を踏み入ると、木製建具のディテール、アクリライトの色彩、木製の手摺笠木、6色に塗り分けられたスイッチプレートなどなど、まさにコルビュジエ仕込みの吉阪ワールドに包まれる。

特に階段スペースにあるレリーフには、家族の手形とともに、吉阪の手形と「Tak」というサインが刻まれている。

ホールを挟んで、それぞれの正方形が住宅内の「公」と「私」に明快に分けられている。上下足の区別のない室内空間を進み、「公」のスペースであるサロン(居間)へ入ると天井がぐっと高くなり、レンガ壁のゆったりと落ち着いた空間へと導かれる。

サロン(居間)の天井を見上げると、屋根スラブを支える梁が正方形の各辺の中央にある壁柱をつなぐ形で架けられている。公・私それぞれの正方形は、平面プランをつくる正方形と、それから45度振った構造システムの正方形の2種類の異なる正方形を重ね合わせた構成になっていることがわかる。



玄関・ホール 2つの正方形の間の空間

つまり浦邸は、平面に関わる2つの正方形と、構造システムに関わる2つの正方形、合計4つの少しずつ大きさの違う正方形を重ね、離し、ずらして構成されているのである。

それはまた、構造システムと平面の構成を明快に分けることになり、これもコルビュジエの近代建築五原則のひとつである「自由な平面」を獲得している。

■変化すること、しないこと

建物内部を見ていると、ひとつの疑問が浮かんできた。ピロティで感じられた開放感が、2階の室内では感じられないのである。浦邸の特徴的な構造形式により獲得された四隅の開放が、2階の開口の取り方では生かされていないと感じられた。

しかし、よく見ると各部の材料の選択に設計者の意図が込められていることに気付く。公・私それぞれの正方形で、鉄筋コンクリートにより一体に造られているのは、柱梁と2階床及び屋根のスラブのみで、外壁のレンガ積みも間仕切の木軸壁、CB壁も取り外し、入れ替えが可能のように造られている。これはコルビュジエのドミノ・システムの発展形ととることができよう。吉阪は生活の変化に合わせて、建築は変化していくものだと考えていたのである。さらに、吉阪は浦邸の正方形のプランが増殖することにより、増築可能なシステムであるとも考えていた。

これに対し、浦氏は吉阪とは反対に、建築とは竣工した時が完全な姿であり、それを変えるべきではないと考えられている。厳密な理論と美しい証明を追い求め、「数学は芸術である」と語る数学者・浦氏ならではの、厳格で明快な考え方である。これにより、浦邸は50年という歳月を経てなお、竣工時の姿を忠実に残しているのである。

■1950年代

1950年代の日本は戦後の復興期にあたり、新しい日本人の生活様式が模索され、新しい住宅形式が求められた時期である。関西では、西宮・芦屋などの阪神間に建築家による住宅が建ち始めており、清家清、広瀬謙二、坂倉準三などが、新しい時代にふさわしい住宅形式の提案を行っていた。

浦邸もこの中のひとつと考えられるが、浦氏は「提案などということはいっさい考えていない。私自身の住む家を造っただけです」と、これについても態度はきっぱりとしてい



サロン(居間) 45度に振った2つの正方形の重ね合わせ

る。しかし、もし吉阪に同じ問いかけをすれば、きっと違った回答が返ってきたであろう。ここでも浦氏と吉阪の考えはぶつかる。ただし、この衝突は幸福な結果を生み出した。

ここで、浦邸という住宅は、数学者・浦太郎と建築家・吉阪隆正の2つの個性が相見ることにより生み出されたものであり、竣工してからの50年間は、まぎれもなく浦夫妻の浦邸であったことに改めて気付かされるのである。



2階



作図：田中榮彦

■見学を終えて

最後にもう一度外観を見上げたとき、壁柱で持ち上げられた2つのボリュームは、この住宅を生み出した2つの個性、浦氏と吉阪が肩を寄せたたたずんでいるように見えた。

いやむしろ、若き日にお二人で暮らしたパリの地図を、今なおテーブルクロスとして用いられている、仲睦まじい浦太郎・美輪子ご夫妻が寄り添い立っていると言えきかもしれない。

1955年秋に来日したコルビュジエは、坂倉準三設計の住宅の現場を訪れるために嵐川まで足を伸ばした。この時、浦邸は着工直後で、その姿をまだ現していなかった。吉阪昌郎を「面白い住宅だが、タカ(吉阪)にしか住めない」と評したコルビュジエが、浦邸にどのような感想を述べたか、できることなら聞いてみたいものである。

西宮市の夙川の近くに建つ「浦邸」は、今年、竣工から50年を迎え、吉阪隆正設計の希少な住宅として国の登録有形文化財化も目前です。

今月はその浦邸のクライアント（建築主）である浦太郎・美輪子ご夫妻を訪ね、建築家吉阪隆正氏との交流を含め、建築当時から現在にいたるまでをふり返っていただくとともに、未来にかけて、我々建築士にも含蓄深いお言葉を聞かせていただきました。



浦太郎 (数学者/理学博士)・美輪子 (うら たろう・みわこ)

浦太郎氏は1920年東京都生まれ。天文学者を志し萩原雄祐教授のもとで天文学を学んだ後、数学に転向。東京帝国大学理学部天文学科卒業。同大助手から神戸大学理学部(数学科)助教授、教授歴任し'84年定年退官。この間、理学部長を兼務。その後、神戸学院大学教養部教授、'91年定年退職。直ちに同大特任教授に任ぜられ'94年退職。

また戦後'51年フランス政府給付留学生として渡仏した他、アメリカ合衆国RIAS研究所客員研究員、ノースウェスタンリザーブ大学客員教授、ストラスブール大学客員教授にも就任。

著書に福原満洲雄との共著『ポアンカレ常微分方程式』(共立出版/現代の数学系譜6/1970年)など。

美輪子夫人は満州生まれで津田塾専門学校(津田塾大学)卒業。ふたりはF・L・ライト設計の帝国ホテルで44年結婚披露宴を行う。長男は東京大学教授で同大生産技術研究所海中工学研究センター長、浦環氏(工学博士)。



吉阪隆正
'55年建設中の浦邸にて
(浦太郎氏 撮影)

出会い

浦邸のクライアントである浦太郎氏と建築家吉阪隆正(1917-'80)の出会いは、1951年のマルセイユ、浦氏31才、吉阪氏34才でした。浦氏が当時第二回フランス政府給費留学生として渡仏した折のことです。すでに神戸大学理学部(数学科)助教授の辞令を受けており帰国後は東京から神戸に転居することが決まっていた浦氏は、帰国後の自宅の設計を依頼しました。当時吉阪隆正は、'50年より第一回フランス政府給費留学生として渡仏し、ル・コルビュジエのマルセイユのアトリエで仕事をしていたということです。

設計にあたり、ふたりの建築の共通項はやはり、ル・コルビュジエであったそうで、このフランスでの生活体験とともに浦邸に及ぼした影響はとても大きかったように思われます。

一まず、吉阪隆正さんとの交流についてお聞かせ下さい。

浦氏:マルセイユの仕事を終えた吉阪はパリに戻ってきました。ふたりはパリの大学都市の日本館(留学生のための寮)に住み、同じフランスの空気を吸いつつ、大戦後の世界を見つめていたように思います。大したつきあひもしなかったですが、仲は悪くなかったですね。一度、パリの街を一日、ふたりだけで歩い

たこともありました。

美輪子夫人:静かな方でした。太郎とは気があったというか、もう少し遠慮がなかったようですね。

美輪子夫人も'53年にフランスを訪れ、半年ほど異文化の地を共有なさったそうです。

現在の姿

さて、浦邸は1956年春に部分竣工し、入居、10月に完成します。とはいっても外構など、年を経て徐々に形づくられたものも多く、ことあるごとにアプローチの床などに記されたサインや日付、イラストや記号が時の流れを写して現在にいたっていることがよくわかります。

隣接する回りの状況も50年の間に大きく様変わりしたようです。新築当初、浦邸が草原に建つ親子象の如くだった風景からすると、まわりは一変どころか、二変、三変してきています。

最近では、震災後、崩壊に建っていたマンションが解体されたり、前面道路の拡幅により敷地が大きく削られるなど、その変化は今日も尚、続いています。しかし、建築当初の姿をほぼ完全に残した浦邸は、現在もなお、初々しく輝いています。

浦邸の50年

浦氏:建築家として吉阪を選んでよかったと思います。満足しています。

竣工から50年を経て、この建物に望んだものが得られた感慨をこう述べられました。

一浦邸は西宮市南郷町に建ちますが、なぜこの土地を選ばれたのでしょうか。

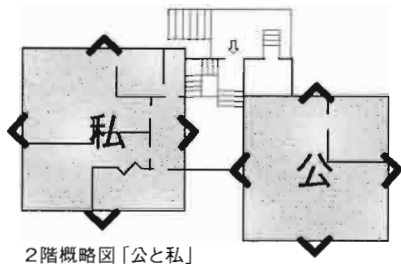
浦氏:フランスから帰ってからパリでの約束を実現するために、吉阪さんもいっしょに、須磨や垂水などあちこち見て回りました。宝塚ホテル近くの斜面地が候補にあがり、吉阪はそこが気に入ったみたいでしたが、結局、交番が近かったことや駅に近



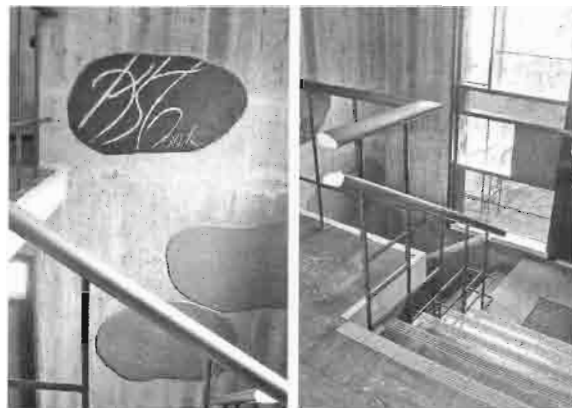
引越した頃の子供たちと浦邸(浦太郎氏 撮影)

いこと、子供達の学校の
ことを考えてここ、西宮
に決めました。

このあたりには、同
時期に建てられた松下
邸（坂倉準三設計）な
どコンクリートを使っ
たモダニズム建築がい
くつかありましたが、
今はそれらのほとんど
が建て替わっています。



2階概略図「公と私」



玄関と階段ホール

3つの希望

この建物は144枚にも及ぶプランニングの変遷があつてできあ
がったといわれています。

浦氏の要望は大きく3つ、コンクリート造であること、ピロ
ティにすること、上下足の区別をしない家とすることでした。
浦氏：靴を履いたまま入る家、これはやはり成功だったですね。
よかったです。あくまで私見ですが、畳の部屋に靴なし
の洋服姿で座る姿はいただけない気がします。一方、靴履きの
空間での和装姿は洋装に劣らず美しいものです。

美輪子夫人：バリで経験した靴履きの暮らしはとても活動的
でした。今もとても気に入っています。

いずれも、暮らし方へのポリシーがよくわかる言葉です。

前述の3つの要望の他に、暮らしの中で「公・私」を明確に
区別するよう望まれたことが、結果的に浦邸にふたつのコンク
リートボックスという空間構成を生んだようですが、「私」ス
ペースにおける家族ひとりずつの「個への敬意」と、家族が揃
う場としての「公」スペースでの「家族の和」を望んだことが、
次の言葉でも知ることができます。

浦氏：夕食時には帰ってくる生活でした。個室では自由でも、
食卓を囲むときには、しかるべき服装でみなが揃うよう暮らし
てきました。勉強の合間の休憩や就寝前のひとときなどは、サ
ロン（居間）で音楽や会話をともに楽しんだものです。

美輪子夫人：三人の子供達が大学に進学するまで貫いたテレビ
のない生活は、同居していた母親の協力もあって実現したこと
です。母には気の毒で、子供達には少しかわいそうでしたが……

一ピロティについては、

浦氏：当初の想い通り、大地はみんなのものとして、敷地に入
ることも写真を撮ることも「ウエルカム」その代わりピロティ
の上は我々のプライベートスペースです。

今、前面道路拡張のため10m以上もの敷地が道路となり、
そのファサードを露わにしている浦邸は、門扉もなくピロティ
越しに敷地の奥深くまでが見渡せ、行き交う人々に美しい透け
る空間と緑を与えています。

一ただ、コンクリート造であることで、少々困難があつたようで、

浦氏：陸屋根下の天井面には木毛板を使って断熱効果も考えて



二つの箱とつなぎのホール

あり、まあまあなのですが、床面のコンクリートはとても冷え
ます。床暖房まで設置するには予算の関係もありましたが……。
美輪子夫人：西側の部屋はとても暑くて、夏はおられません。
震災後、壁を覆っていた蔦をとってからは一層暑い。また、
コンクリートに埋めた鉄管が錆びたため、配管のやり替えには
大変費用もかかりました。

浦氏：お陰で、ポンプドセンターみたいに配管を露出するこ
とになりました。

と、想定外のこともあつた50年であつたそうです。

一あえて、現在の浦邸に不満足な部分がおありかとお尋ねすると、

おふたり：全体的に、ひとまわり広いとよかったですね。三人
の子供、六人の孫、またそのつれあいとひ孫までと、すっかり
家族が増えたこともあります……。笑
うれしい不満を伺えました。

同じ「家」でも、クライアントにとっての「家」と建築家にと
つてのその「建築」は、もしかしたら違う次元のものである
かもしれないのですが、結果、長年積み、暮らすクライアント
の「真の家」にするためには、確かな建築家選びと、クライ
アント自身のゆるぎない生活理念が大事なのだと痛感したインタ
ビューでした。また浦邸が吉阪建築のなかでもとりわけ完成度
の高い設計されていることへの驚きは、こうした浦氏の言葉に
より初めて一部氷解した気がいたしました。浦ご夫妻には心よ
り感謝申し上げます。

（文・稲上文子）

浦邸データ

所在地 兵庫県西宮市南郷町 / 竣工年 1956年

設計者 吉阪研究室（吉阪隆正）

施工者 株式会社横田建設大阪出張所

構造、形式及び規模

鉄筋コンクリート造 ピロティを有する二階建て 陸屋根

建築面積 / 131.24平米

延べ面積 / 148.88平米（1階 / 18.46平米、2階 / 130.42平米）

外部仕上

杉型枠コンクリート打ち放し仕上げ、煉瓦積み二重壁

参考文献

『吉阪隆正の方法 浦邸 1956』（齊藤祐子著、すまいの図書館出版局、
1994年）、『吉阪隆正とル・コルビュジエ』（倉方俊輔著、王国社、
2005年）

’06年9月10日インタビューの参加者：奥村由和情報委員長、情報委
員田中崇治、同稲上文子、ヘリテージマネージャー山崎誠氏、同谷守正
康氏。浦邸登録文化財申請のための調査と平行して行いました。

特記なき写真・図は、稲上文子 撮影・作図